

Book Review



月刊「歯界展望」別冊 Q & A 歯科のくすりがわかる本 2014

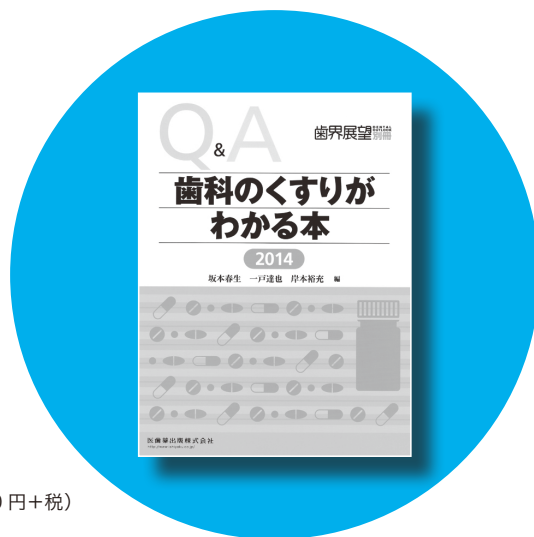
坂本春生・一戸達也・岸本裕充 編



Reviewer

中川洋一 Yoichi Nakagawa
(鶴見大学附属病院口腔機能診療科)

A4 判変, 208 頁
定価 (本体 5,800 円+税)
医歯薬出版刊



坂本春生教授は手術の達人だが、言葉の魔術師でもある。科学は急速に進歩するし、天変地異にも見舞われ、めまぐるしい。世の中は“アベノミクス”や“お・も・て・な・し”に沸いているというのに、歯医者は相変わらず患者さんの口のなかをのぞく毎日だ。覗くといっても、危険が伴う。だから細心の注意を払うし、最新の知識を勉強する。最良の治療を行うためだ。この本はその手助けになる!! このような“はしがき”を書ける歯医者はなかなかいない。これが編者代表の坂本春生先生である。

一戸達也教授は、歯科麻酔界の大御所で、当初から『Q & A 歯科のくすりがわかる本』を編集・執筆されている。歯科治療におけるリスク・マネジメントとクライシス・マネジメントの解説には定評がある。

好評につき3冊目の改訂版となったわけだが、口腔マネジメントで飛ぶ鳥も落とす勢いの岸本裕充教授が新たに編集に加わった。本の構成とトピックス選択に良い影響を及したものと推

察する。

「くすりが専門」の3大教授が、日常臨床での実践的な「くすりの使い方」について、臨床医のために読みやすく書いたのがこの「くすりがわかる本」、目次を見るとその魅力が伝わってくる。1. くすりの基礎と知っておきたいトピックス、2. 抗菌薬、3. 鎮痛薬、4. 歯科用局所麻酔薬、これら4章に大きく分かれている。シンプルだ。それぞれの章には、いつも思っている疑問が列挙されている。開業医の先生から募った Question に応える内容での構成である。

若い世代は、インターネットの普及の影響なのか、索引を使って本を読むことが多い。教科書を辞書的に用いるのである。索引派の彼らに聞くと、目次は見えないという。目次派の高年齢世代は、目次をもとにパラパラとめくる。

ところが本書は、両方とも重要である。「妊娠中の婦人への薬物投与は?」「先制鎮痛とは?」「鎮痛薬が効かないときは?」「救急薬の取り扱いとは?」目次をみると基本～高度～最新まで、

知りたい Answer が一目瞭然である。

索引は、薬剤名検索のためにある。「一般名」と「商品名」が記載されており、しかも「一般名」と「商品名」が色分けされていてありがたい。知りたい薬剤は索引からダイレクトにアクセスする。

読み物として順番に読み進んでもおもしろい。新しく特徴的なトピックスとして興味深いものが多いからだ。

1) 新規歯科適応になったトラムセツトやリリカ、2) アセトアミノフェンの投与量変更、3) 新しく開発された抗血栓薬、4) ビスホスホネート (BP) 系薬剤以外の薬剤による骨壊死、5) 知っておくと便利な外用薬や口腔ケア関連製品 etc...

各項目の記載は薬剤の効能・効果の単なる羅列ではない。実践的な処方レシピ、デシジョンツリーで示した処方の考え方など、踏み込んだ内容となっている。緻密な構成、選りすぐられたトピックス、記述の技術、あらゆる面でアトラクティブな本書をぜひチェアサイドにそろえたい。

Book Review



長期経過症例から導く 欠損補綴設計の フォーカスポイント

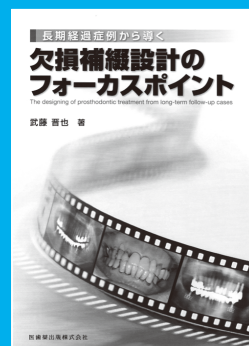
武藤晋也 著



Reviewer

本多正明 Honda Masaaki
(大阪府・本多歯科医院)

A4判, 196頁
定価(本体12,000円+税)
医歯薬出版刊



本成書には、近年インプラント補綴が脚光を浴びるなか、術前と術後を比較、検討するだけではなく、長期経過症例を通し、次世代の先生たちに伝えることが多く書かれている。

われわれは、歯科臨床の現場で、90%以上の症例に対して機能の回復を必要とし、補綴治療にあたっている。特に欠損歯列に対しては、適正な診査と総合診断に基づき補綴設計をし、治療を施してきた。欠損歯列の状態によって、機能回復の補綴オプションを決定し、インプラント（オッセointegrationタイプ）が臨床に活用されるまで、多数歯欠損には、パーシャルデンチャーを、少数歯欠損には、ブリッジで対応してきた。

しかし、その術後長期にわたって安定した症例が、どれくらいあったであろうか？ 私見ではあるが、臨床の場で問題を引き起こした多くの症例に対し、再治療に際しては、いろいろ検討を加え工夫するが、トラブルの原因を考察してこなかったことが、欠損歯列がどんどん拡大してきた誘因の1つと考える。

また、機能回復に活用する補綴物は、人工物で、毎日機能を営むために使用している。このことは咬合力が加わり続けていることである。であれば、必ず調整・修正・修理、時には再製を余儀なくされる。特に再製が必要になったときは、前の状態のときより条件が悪くなっていると考えておいたほうがよいであろう。この現実から補綴再治療時は、可能であれば複雑にならないほうが患者・術者ともに精神的、時間的、経済的、その他の面から有利である。

このようなことから補綴を立案するときは、次の一手を考えることが重要である。そして適正な治療計画を立てるうえで、重要視すべきことは、エビデンスに基づいた基礎・臨床研究があげられるが、それと同様あるいは、それ以上に重要になってくるのが、臨床判断（クリニカルジャッジメント）である。この判断力を身に付けるために最も大きな影響を与えるのが、自分自身で施した長期経過症例の検証である。もちろん、検証するなかで、術者自身の技術の未熟さに原因があるならば、技術をしっかり習得する訓練が、

必要不可欠である。

本書の第1・第2章は長期経過症例を数多く取りあげ、日常臨床に役立つ見方について述べられている。特に考察のところを熟読し、その意味合いをくみ取ってほしい。第3章は「パーシャルデンチャーによる欠損補綴設計のための構成要素と連結様式」に100ページ程、本の半分をあてられている。この細目を読んでも、今日までの成書と異なっていることに気づかされる。構成要素と連結様式はもちろん、咬合支持を頭において咬合に対し考察を加えられている。最終の第4章は、パーシャルデンチャーのマイナス要素を、インプラントを応用することにより、良好な予後を得るための補綴設計が日常臨床に役立つようにまとめられている。

最後の総括は、まさしく近年の欠損補綴、特にインプラント補綴への一助になると考える。経験のある先生には欠損補綴を見直し、次世代の先生たちには、欠損歯列と欠損補綴を正しく理解するために、ぜひ読んでもらいたい臨床成書である。